

Wessex Dialect の研究

茂 松 文 雄

Dialect の研究が語学の研究にも文学の鑑賞にも極めて必要であることは今更ら言うまでもないが、今日録音器の利用によって、将来は dialect speech の実態を通時的にも、共時的にも、録音再生して、観察研究が出来るであろう。

筆者は昨夏一ヶ月渡英、主として、Midland の dialect の実態を micro cassette-corder におさめて、その結果を、「Midland Dialect 聞きある記」として、本学の『英米文学研究』第12号に掲載したのであるが、今年11月23日には本学で日本ハーディ協会の学会が行われるので、Hardy が常に熱愛して、その郷土の小説の中に local colour を適度に活かそうと用いた Dorsetshire の dialect を昨年 Midland 地方を旅しての途次 Wessex 地方で耳にした僅かな経験を手蔓として、集め得た文献資料などをもとに、研究した West Saxon dialect の直系である Wessex dialect の片鱗に触れてみたい。

Dialect はどこの国でも最も広く認められている基準とは異っている話し言葉の形式であるが、次のような三つの特徴を持っていなければならぬ。

- 1) 話される語彙の特異性
- 2) 使われる慣用語の一般特異性
- 3) あらゆる音声とその抑揚にわたって影響する発話の特異性。

わが邦語でもそうであるが、英国方言はその固有の社会的理由から、方言にはそれぞれ頗るきめの細かい意味の違いがある。十哩と離れた村落によって全くもの話し方が異なる。方言はまた現代文明の世界では頗る安定し難い。地方の産業化、それに伴う建築様式の進展、外から訪ねる観光そ

の他の諸団体の影響等によってその dialect speech の力が迅速に変わる。かかる状況下では trained phonetician もその speech sounds の微妙な違いを弁別することは殆ど不可能だと云っている。(cf. Elsie Fogerty, C. B. E., British Drama League)

さて前述のようなわけで、Wessex dialect と言っても、King Alfred の時代の Kingdom of Wessex の範囲は広く、凡そ Dorsetshire に、東は Hampshire、北は Wiltshire, Berkshire, Somersetshire、西は Devonshire の一部を占める東西は 120 哩位から南北は 80 哩に及ぶ地域であるから、それ等全地域に亘る dialects に就いて調べるのは容易な仕事ではない。今研究の領域を Hardy が好んで用いた Dorsetshire の方言に狭めてみても、その周辺の Wiltshire, Somersetshire 等の方言についてすらも微妙な相違のあることは、Tess の XII の初頭に Hardy が Somersetshire と Dorsetshire の境にある Blackmore Vale の内側で土地と風景の異なるように、住む村民の気風や言葉つきまで違っていると云っているのでも想像出来る；
The ascent was gradual on this side, and the soil and scenery differed much from those within Blakemore Vale. Even the character and accent of the two peoples had shades of difference, despite the amalgamating effects of a roundabout railway; so that, though less than twenty miles from the place of her sojourn at Trantridge, her native village had seemed a far-away spot.

本文の中で所謂 'shades of difference' と云っているのは既説の慣用語の一般特異性、あらゆる音声とその抑揚にわたって影響する発話の特異性の上にわたっても現われているのであって、このように語調の微妙な shades of difference に至っては trained phoneticians と雖も捕捉して記述出来るものではないが、幸い筆者は London で入手した Tape-records によって耳を通して活きた発話を聞き、それを出来るだけ broad notation による phonetic transcription (但し微細を要する個所には narrow notation を用いる) を本文末に standard passage と対照添付することとした。

さて、そこで筆者は広い Wessex Dialect の範囲を Hardy が主として用いている前記 Wiltshire と Somersetshire の境の Blackmore (Blakemore と

も綴る) Vale の dialect に絞って研究した所を簡明に述べることにする。

本 論

Wessex dialect は既述の如く West Saxon dialect を祖として今日 Southern England の諸州に活着ていることは前述の通りであるが、これが歴史的な検討は省き、Hardy が用いた Blackmore Vale の dialect を中心として、筆者の浅い経験と Hardy の Tess 等からの資料をもとに、先づ発音の面から眺めることにする。

1. 発 音

A. 短母音には [i], [i:], [e], [e:], [æ], [æ:], [a], [a:], [ɔ], [ɔ:], [u], [u:], [ə], [ə:], [o], [ʌ] の16音の外に

(1) 一個特異な [é] がある。[e] よりも more closed vowel で、Wessex Tales の The Three Strangers; ‘Well, well,’ replied the constable impatiently; ‘I must say something, mustn’t I? and if you had all the weight o’ this undertaking upon your mind, perhaps you’d say the wrong thing too !—Prisoner at the bar, surrender, in the name of the Father—the Crown, I mane!’

Tess, XXXIV に “Some says it do mane (= mean) one thing and some another” と標音の綴で頻出するのは、[mé·n] と発するのであろう。

この音はまた時には、[mæ̃n] とも発音する。Tess XVII では You’ll want a dish o’tay. の如く [te·] (=tea) と発している。

(2) [i:] は標準音 [i:] より余程短かい。例. meet [mi:t]; feet [vi:t] ではこの地方では [v] と発せられ、s は [z] と発するのが特徴である。例. zeed (=seed=saw) [zid], Tess IV, …when I zeed her vamping round…又 keep も [ki:p] である。例. Tess, XII,—them I kips for slums and sea ports. (スラムや港町にとっておいてあるのを…)。従って、ship も sheep も homonym である。故に meet, feet の母音はいづれも [i:] である。

[i:] の音で “ea” と綴るものは [iə] と発せられることが多い。例. bean

[biən]; beast [biəst]; clean [kliən]; mead [miəd]. 然しこの場合速く軽く発せられると、屢々 [ie] と聞える。

(3) [i] は元来 accent がないと不安定な音であるので、Wessex dialect でも obscure な [ə] 又は [ʌ] となるようである。例. bridge [brədʒ], will [wəl], さらに [wol] とも発せられる。

(4) [e] は lip-spread されて、時に [æ] と発せられたり、又 [ɑ] と lip-round されて、口の奥から発せられる。例. beg [bæg]; egg [æg] 又は [ɑg]; pen [pæn], ten [tæn]. 従って bag, beg も pen, pan も ten も tan も homonym となる。

(5) [ɑ:] 音の中で綴字に r を含む或るものは [iə] と発せられる。例. arm [iəm]; card [kiəd]; garden [giədn].

(6) [ɑ:] の或るものは [æ] 又は [æ:] と発せられる。例. after [æ:tə]; father [væðə] 又は [væ:ðə]; half [æ:f] (注) a'fternoon [ɑ:tənú:n] の如く、[f] が落ちたり、half の如く [h] が落ちる。

(7) [ɔ:] は [é] 又は [e:] と発せられる。例. jaw [dʒé] 又は [dʒe:]; straw [stré] 又は [stre:].

(8) [ɔ:] で or と綴るものは多く [ɑ:] と発する。例. born [ba:n]; corn [kɑ:n]; forty [vá:ti]; orchard [ú:tʃit]. (注) [ɑ:] は時に [ə:] とも発せられるようである。

(9) [ə:] は [n] の前では [iə] と発せられる。例. earn [iən]; learn [liən]; fern [viən]. 然しこの場合 [iə] は [eə] と聞えるようだ。earth は [iəθ] と [eəθ] ともなる。

(10) [ə:], [ɔ:] は次に [s], [st], [z] の続く場合は、よく短かく [ʌ], [ɔ] と発せられる。例. burst [bʌst]; cursed [kʌst]; first [vʌst] である。

(11) [ʌ] は時に [au] と発せられる。例. crust [kraust]; dust [daust]; rut [ráut].

(12) [ʌ] の中でも、prefix “un” は [ɔn] 又は [on] と発せられるのが常である。例. Tess XXIX, unluckily; unreasonable 等は Tess VII,—and at no onreasonable figure. の如くみな on- を以て標音的に綴ってあることが

多い。

(13) [ei] の次に子音が続く場合 OE では [ɑ] であった為か、又はその系統の音であったものは [iə], [æe] 或は [ie] と不安定のものが多い。例. *bake* [biək], [beək], [biek]; *cake* [kiək], [keək], [kiek]; *name* [niəm], [neəm], [niem]; *tale* [tiəl], [teəl], [tiel]; *tame* [tiəm], [teəm], [tiem].

次に参考として, W. Barnes, *Grammar and Glossary of the Dorset Dialect*, p. 13 からの standard passage を quais-phonetic notation であらわされたものを示すと;

What have you made of the old lame mare that you were leading up the lane from the mead (=meadow) ?

=what have ye a-meäd o' the wold leäme meäre that you wer a-leäden up leäne vrom the meäd ?

(14) [ei] は上記の外は多く [ai] 又は [æi] と発せられる。例. *paper* [paipə, pæipə]; *tail* [tail, tæil]; *hay* [ai]; *may* [mai]; *stay* [stai]

(注) *day* は [dæi, dé] と発せられる。

(15) [ɔi] は前に [b], [p], [t] が来ると [woi] 又は [wæi] となる。例. *boil* [bwoil, bwail]; *point* [powint, pwoint] (注) [b], [p] の場合, bilabial consonant であるため [w] を導入する因となりやすいと思われるので, *moil*, *moist* は如何んと調べてみると [mwoil], [mwoist] 等があるが [w] の入らぬものもある。(Wright; *English Dialect Grammar* 参照)

(16) [ou] が [wo:] となるものがある。例. *oak* [wo:k]; *bold* [bwo:ld]; *cold* [kwo:ld]; *old* [wo:ld] (注) 邦音オ [o] とヲ [wo] に似る。

(17) *coffer*, *comely* も *Kwoffer* (cf. *Tess IV*, another rested on the oak-carved 'cwoffer'); *cwomely* (cf. *Tess XIII*, Why is your *cwomely* face tied up in such a way ?)

(18) (17) の例から類推すると [ou] の多くは, [woə], [wuə], [wʌ], [uə], [ɔə], [oə] のように発せられるのは首肯出来るように思われる。例. *oats* [woəts, wuəts, wʌts]; *goat* [gwoət], *coat* [kuət]; *gold* [guəld]; *open* [ɔəpn, oəpn] の如く発せられる。(cf. Wright, *English Dialect Grammar*.)

(19) その他 old が [wɔld] と発せられて、wuld と Tess には綴られたり、home が hwome と綴られているのは、[úəm] wɔlm, wuəm, woəm] の如く Dorsetshire では色々に発せられると Wright, E. D. G. にあるので、その発音も想像される。尚 fellow が [féloː]; shadow が shadder [ʃædə]; swallow が swaller [zwɔlə]; nature が nater [naitə]; continue が continys [kəntini] の如く unstressed final syllable が weaken されるのや established が 'stablished; 'scutcheons (=escutcheons); 'count (=account); 'prentic (=apprentice) 等のように stress のない語頭の音又は音節が脱落する現象はただに Dorset の方言のみでなく一般にも起る言語現象であろう。

2.

B. 子音 Dorsetshire, Wiltshire, Somersetshire を訪ねる旅人の耳を先づ驚かすのは [f] 音が田園地方の人のことばに少く、[v] 音が多く、[s] が [z] と有声化することであろう。従って、Somerset をわが東北地方の「ズーズ弁」と揶揄するように [zɔməzɪt] とその発音を真似るのを Manchester で耳にしたことがある。さらに気をつけて耳を傾けると [r] が Southern English のものよりもその響きが激しいようであるのは筆者の如き、通りすがりの旅人の耳を驚ろかしたところであった。然し子音については母音ほどに微妙な差異は少く、彼等の話し振りに注意しているうちに、次のような点に耳慣れてゆくに従って、大体の意を把握出来るように思われる。

(1) Teutonic origin の語頭の [f] は大抵 [v] と発せられる。例. four [vauə]; five [vaiv]; feed [vi:d]; fast [vɔst]; fowl [vaul] 注 1. West Somerset, West Devonshire では語頭でなくとも f は [v] となる。例. life [laiv]; wife [waiv] 注 2. Romance origin の語の f はそのまま。例. family; famine; figure, etc.

(2) 但し、注意を要することは、語頭に f を持つ Teuton 系の語でも Homophone は次のように区別することがある。

- a) [v] と発するもの; fall (v), fowl
- b) [f] と発するもの; fall (=autumn), foul

(3) Teutonic の語頭の s は [z] となる。例. send [zæɛn]; so [zu:, zo:];

said [zaid]; zeed (=seed=saw) [zi:d]; zay [zei] (=say); zet (=set) [zet]

(注) 外来語にはこの現象は起らない。例. servant; science; sabbath; etc. の s はいづれも [s] である。

(4) f の場合と同様に、語頭に s を有する Teutonic word でも homophone は次のように区別される。例. 1) see; sun; set (v.) は [z]; 2) sea; son; set (n.) は [s] と発音する。

(5) 語頭の th は [ð] と発音する。例. think [ðɪŋk]; thunder [ðʌndə]; Thursday [ðɜ:zdi]

(6) r の前では [θ] は [d] となる。例. three [dri:]; throw [dro:]; through [dru:]; threshold [drʌʃəl]

(7) 母音間の [d] は [ð] と発せられる。例. fodder [vɔðə]; ladder [læðə]; etc.

(8) [n] の前の [v] は [b] と発せられることが多い。例. seven [zæbn, zébn]; eleven [læbn, lébn] (注) 上例の如く [ilébn] の unaccented 頭音又は音節は elide する。尚この [b] は [v] と正しく発せられる場合もあって、一定しない傾きもあるという。(cf. Wright, English Dialect Grammar)

以上の外に子音脱落はこの地方の dialect にのみ限って現れるものではない。ここでは Tess によく見かけられるものを挙げるにとどめる。

(9) [d] の脱落

poun' (=pound); chil' (=child)

(10) [f] の脱落

baily (=bailiff); neckercher (=neckerchief)

(11) [h] の脱落

'em (=them); 'en (=OE. hine=him); 'a (=OE. he=he)

'er (<OE. he=he)

(12) [l] の脱落

a'most (=almost); a'ready (=already); on'y (=only)

(13) [t] の脱落

projeck (=project); tex (=text)

(14) [ð] の脱落

wi' (=with)

(15) [v] の脱落

ha' (=have); hae (=have); hain't (=haven't); gie (=give)

(16) [w] の脱落

for'ard (=forward); innerds (=inwards); 'ill (=will); 'ithout
(=without); summat (=somewhat); summut (somewhat)

(17) [j] の脱落

'ee (=ye); ees (=yes) (注) Dorset では yes は一般に [i:s] である。又 o't (of it); o' the family (=of the family) 等は頻繁に聞かれるところである。all of it は [ɔ:l əv it] とも [ɔ:lɔ't] とも発音され, all of them は [ɔ:l əv em] とも [ɔ:l ə'm] とも発音される。

文 法

発音については以上特に著しい点をあげたが、文法ではそれほど注目に値する点を見ない、というのは裏に Midland dialect に於て見られた所に類似する点が多いので左程奇異の感を起さぬのである。例えば

(1) 冠詞についてみるに、古い年代の教育の低い人は an を用いる所も a を用いるのは Midlander と等しい。Tess の文中にも、old をとる名詞の前は a old lady; a old aged man の如く記している所が多い。この点 Midland dialect では a, an の用法は学校教育以前では一般にやかましく云わず、総て a でかたずけるのと一脈通じているようである。

定冠詞も [ð] であって、t'other day とあるのは that other day の that の語尾 't' がかすかに残ったものであろう。

(2) 名詞及 形容詞の特殊形, thik 等。1) 古い名詞の複数語尾 -n は今日の Southern English では, oxen, children, brethren 等に僅かにその痕跡を留めているのみであるが、この地方には次の如き複数語尾, -en のものが田園地帯では尚今日も古い世代の間には通用している。例. kine [kain]

(=cows); cheesen [tʃi:zn] (cheeses); eyen [i:n] (=eyes); housen [áuzən] (=houses); placen [pliəsən] (=places); shoən [ʃu:n] (=shoes); etc. (注) mile, pound, 等総て reckoning, measurement を表わす名詞は複数の場合もその変化をせず, 25mile; a thousand pound の如く用うるのは Midland dialect と同様である。

2) 此の地方の方言で標準英語ではとり上げぬがこの方言の理解には見のがすことの出来ぬ一事がある。それは Barnes の A Grammar and Glossary of the Dorset Dialect, p. 21 でも述べているが、名詞を2種別到大別していることである。

一つは一定の形状を有するものと他は一定の形状を有せぬものである。前者を¹⁾ Personal nouns. 後者を²⁾ Impersonal nouns としている。

1) の例は即ち man, woman, carriage, house, etc.

2) に属するものは, water, kindness, afternoon, etc. この区別は一見さほど重要ではないように思われるが、これが此の地方の代名詞、ひいては形容詞に不可欠な関係を持ち、この方言の徹底した理解に必須となって来る。Barnes の説明を借りて、先づこの方言に特有な *thik* と *this* の用法を Tess, iii の例文によって調べる。

Had it anything to do with father's making such a mommet of himself in *thik* carriage *this* afternoon? (それは今日の屋すぎ父があゝの馬車に乗って笑いものになったのと何か関係があったの?)

この文中 carriage 即ち personal noun に用いた *thik* は Barnes の云うように Dorset では *that* を意味し、同じ Wessex 地方でも Hampshire の北部では *this* のみを意味するので Dorset dialect で書いた上文では afternoon なる impersonal noun の *this* はちゃんと使いわけて用いていることが判る。それならば、personal noun に *this* は用いないので、*this* の意味では何を用いるかということ、そのために *thease* [ðiaz] と云う語がある。故に、Barnes の文例で、

Come under *thease* tree by *this* water.

Goo (=go) under *thik* tree an' zit (=sit) on *that* grass.

の如く使い分けるのである。thease ground; thik ground と云うと、“ground” は区域形状の定った畠の謂であり、this ground; that ground と云うと境域の定まらぬ土地を云うのである。Dorset dialect ではこのように厳密に使い分けているが、Hardy の作品では、さほどきびしく使い分けてはいないようである。それは Hardy も G. Eliot の Silas Marner におけるように “artistic duty” と云う目的のために大衆に広くわかって貰うことを第一として、方言も適当に活用することを主眼とした作家であったからであろう。

(3) 形容詞 that there (=that), this here (=this) この形は英全土のみならず、更に海外にまで広く伝っているが、此の地方でも盛んに用いられている。例。Tess XIV, ‘She’s fond of *that there* child, though she mid (=might) pretend to hate en, and say she wishes the baby and her too were in the churchyard’, observed the woman in the red petticoat. (「嫌っている風をしても、やっぱり、自分もその子も死んだ方がいいなんて云いながらあの子が可愛いんだ」と赤いペチコートのの女は言った。)

Upon my soul and body, *this here* stooping do fairly make my back open and shut! Tess. xxii (いやはやたまったもんじゃない。こう屈んでちゃ背中が本当にわやになってしまうよ)

(4) 代名詞 上述の ‘thease’, ‘this’; ‘thik’, ‘that’ の用法は代名詞である場合にも適用される。人称代名詞では特に二人称の用法に注意を要する。単数の場合は親しみや侮りの意を含むに用いられるのは殆んど英国全土に亘ると思われるが、特に此の地方では相手を責めたり、小言や争いの場合で、普通は stress をおかず [ðə] と発言する。例。‘How darest *th*’ laugh at me, hussy!’ she cried. Tess X, (よくもおらがこと笑いくさる、こんあばづれめ!)

Ah, *th*’ st (=thou dost) think *th*’ beest (=thou art) everybody, dostn’t (=dost not), because *th*’ beest first favourtie with *He* just now!—ibid. (今のところあの人に一番気に入ってるんで、自分が一ばんえらい位のつもりでいるんだ。)

人称代名詞の二人称単数の使い方をみるに、*emphasis* をおく時は [ðau] と発音するが、そんなことは少い。又上文中の *He* は前置詞 *with* に支配されないのは *emphasize* を強めているため主格形をとり、その上さらに *Capital* にして強調している点注意すべきである。又単数の *you* と複数の古形 *ye* (or 'ee) とが目的格で殆んど無差別に用いられている。例。Good night t'ee.—*Tess* i.(= to ye.)

Ye don't say so !—*ibid* (これは驚いた！)

But *you* will turn back and have a quart of beer wi' me ?—*ibid*

.....I don't mind telling *you* that... *ibid*

序に上文はすべて *Tess* の父即ち同一人の言っている言葉であることを付言しておく。

(5) 人称代名詞の三人称・二人称について特記すべきことは上述の通りであるが、三人称は最も我々外国人にとって紛らわしいので次のように整理して表示する。

1) 単数。

	男性	女性	中性
主格	he, 'a [i:, ei, ə]	she, 'a [ʃi:, ə]	it [it, t]
目的格	en, un, 'n [ʌn, ən, n]	her [ə:, ə]	it [it, t]

2) 複数。

主格	they [ðe:]
目的格	'em [em, əm, m]

上表を便宜上 2) 複数より眺めるに、主格 *they* [ðe:] は何の変りもない。然し目的格 'em も此の地方のみでなく英全土及び米国にまでも行われている。これは元来 *ME* の *hem* (< *OE* dative case, *him, hym, hiom, heom*) と遡ることが出来る。即ち標準英語で dative case, *him* が現代英語の目的格となっているように、古い dative 方言の目的格として保存されているのである。次に単数形の用法をみると頗る注意を要するものがある。即ち既述名詞において述べたように *Dorsetshire* では *personal nouns* (一定の形状あるもの) に対しては文法的にはすべて *he, en* 等男性代名詞を用い、

it は Impersonal nouns (一定の形状なきもの) の場合にのみ用いられている。例. *He's* (=the tree is) a-cut down. *John vell'd* (=felled) *en* (=it). といい、涸れた水を 'Tis a-dried up. である。cf.; However, 'tis well to be kin to a coach, even if you don't ride *en*.—Tess, iv. (でも馬車に縁のあるなあえゝもんだ、それに乗らんかてね。)

Her mind can no more be heaved from that one place where *it* do bide than a stooeded waggon from the hole *he's* in. —xlvi. (あの子の心は穴へ落ちこんでしまった車も同然、一つ所にへばりついて離れたもんでねえ。)

次に 'a (=he) は Tess には頻出する形で、*he* の形より unemphatic であるようである。

“At the present moment,” *he* says to your father, “your heart is enclosed all round there, and all round there; this space is still open,” 'a says. Tess, III. (「現在のところ」とお医者さんが父さんに云って聞かされた—「あなたの心臓は、ここでぐるぐるとり巻かれている。ここでもそうだがここんとはまだあいている。」と医者はいうんだ。)

'un (=him) の例は Tess には、見られないが、'im になったり、un になったりする所をみると、前の語との発音の関係によるものと思われる。Jude, I-ii には次の例がある。

But I've got him here to stay with me till I can see what's to be done with *un*. (だが、ここに引きとって、どうしたらいいか見ることにしたのだ。)

'a (=she) は、He and another man brought her home, thinking 'a was dead.—Tess. xxxiv.

さらに Dorsetshire dialect で特筆すべきことは目的格の代りに主格が用いられる点である。然しこれは仔細に検すると、決して、無規道に行われているのでなく、間接目的の場合か、前置詞の目的であって、しかもその目的を強調する場合であるように思われる。即ち標準英語で、Give him the book. において、普通にはこの語法であるが、him を強調せんとする場合には、Give the book to He. と云うのである。Tess には間接目的の場

合は見当らなかつたが、前置詞の目的の場合、既に(4)代名詞の所で Tess x からの例……first favourite with *He* just now! であげたが、外にも Not on account o' *I*—Tess *i*, 'try your hand upon *she* (xvii); "talk of *he*" (xliii) "hot enough for *I* (xlivi); "to do with *she*" (xlvi) 等頗出するが、必ず emphasis を感じられるようである。

(6) 動詞 Hardy の Dorsetshire dialect の現われる作品中に *I* be; *ye* (you) be; *we* be; *they* be 等の形が頗出するの到我々は唯奇異に感じ、Southern English の訛ったもの位に想像するが、それは決してそんな軽薄なものではなく、遠く Dorsetshire people の父祖の語を伝承し、そがれ世代世代を経て、言語自然の趨勢に従って leveling し今日になったものであるので、一々引例の煩を避けて、OE の West Saxon dialect の古形と現代の Dorset dialect を比較対照する一覧表を示すこととする。

Present Tense

(West Saxon dialect)	(Dorsetshire dialect)
<i>Ic</i> beo	<i>I</i> be
<i>ðu</i> byst	thou beest, bist
<i>he</i> is	he is
<i>we</i> beoð	we be
<i>ge</i> beoð	ye, you be
<i>hi</i> beoð	they be

Past Tense

<i>Ic</i> wæs	<i>I</i> wæs, wer
<i>ðu</i> wære	thou werst, wast
<i>he</i> wæs	he was, wer
<i>we</i> wæron	we wer
<i>ge</i> wæron	ye, you wer
<i>hi</i> wæron	they wer

- cf. 1) That *wer* all a part of the lary!—Tess. iii
 2) このような simplification の結果 *wer* と *was* が同じように用いられ *we*; *ye* (you); *They* に *was* が用いられる。

例. In Saint Charles's day *we was* made knights o' the Royal Oak.

—iii

You *was* on the wrong side.—ivThey *was* married elsewhere.—xxxviii

3) have がこの方言では三人称単数現在でも用いられることは注意すべきである。例。He 've served me well in his life-time.—iv. Cf. have (<OE. hafað, hafð).

4) 過去形で標準英語で strong verb のものの内のあるものが此地方の方言では weak であることがある。例……'twas only three o'clock in the world, and 'a knowed that…XVII. I knowed the man well.—ibid. その外 seed (=saw); zeed (=saw); zid (=saw); runned; feeled 等となって頗出する。これ等の verb は p.p. として出てるのは一々例示を要せぬ。即ち knowed; builded; growed; blowed; catched; hided; slided 等々であって、indicative か subjunctive か決しかねる場合もある。又稀ではあるが奇異の目を見張らせるものは double past 又は double past participle とでも呼ぶべき thoughted に出会ふことである。例。'Tis thoughted that great things may come o't (=of it=out of it).—iii (それから大した事になるかも知れんと思われるんだ。)そうかと思うと、標準英語の過去形が double past 又は p.p. に用いられる。例。Mother is took very bad.—xlix (母が大へん病が悪くなった。)

5) この外 Hardy の方言の中で今一つ指摘しておきたいことは、Dorset dialect の過去分詞がよく a-[ə] なる接頭語を有することで、例ば He've a-lost his knife; She've a-broke tha glass, の如きは Chaucer の y-p.p. の形や Spenser, Milton によくある y-cladd 等の p.p. の遺物、さらに OE の ge- 又は ze に相当する p.p. の徴であらうかと思われる。又これは此の地方の方言のみでなく、標準英語にも残っている alive, afloat, 等の如き語を思わせる、He was a-coming. (又は a coming) その他 a-creeping, a sitting, a-crying の如き形で頗出する verbal substantive であったものと解されている形をこの方言に見

かけることである。尚この -ing の発音は [ən] が普通で [ɪŋ] とも又 Midlanders の発する [ŋ] でもないと聞く。

- 6) Dorsetshire dialect で do を三人称単数でも emphasis なくて、現在を表わしながら indefinite に普通に用いている。勿論その場合は [də] と発音する、emphasis の時は [du:] である。Hardy は文中に何等明示しないので、読者は context によって、語気に注意を怠らぬことが大切であろう。例。He *do* want to get up his strength for his journey to-morrow.—iii と上文の少し上にある、“As soon as it *do* meet, so” などいづれもそれであろうと思われる。did の場合も、past verb のみの単純なものとして did が動詞に密着して用いられている場合には明確な意義上の差違が感じられる。

She *beät* the child. (一回ピシリと打った意)

She *did beät* the child. (続けざまに数回打った意)

この点については Barnes はその Grammar and Glossary of the Dorset Dialect, p. 25 に次のように述べている、

A boy said to me, in speaking of some days of very hard frost, “They *did break* the ice at night, and *did vind* (=find) it auroze ageän nex’ mornèn.” That is they *broke* and *found* several times. If they had *broken* and *found* only once, he would have said: “They *broke* the ice at night, an’ *vound* it,” &c.

Tess の中でも彼女の母親が Alec が diamond 入りの指輪をはめていたと言ふと、Tess の弟の Abraham が横合いから、“Yes, and I seed it! and it *did twinkle* when he put his hand up to his mistarshers (=mustaches).—vi と云う文中の *did twinkle* に注意。

- 7) 尚 Tess の中には古文にみられる如き double negation がこの地方に普通用いられることを示している、Oh, No lands neither 又は I couldn’ make nobody hear at all by knocking XXXIV 等である。尚最後に 数詞の二桁の数を古風な West Saxon 式 (今日の German style で), six-and-twenty, five-and-twenty を用いているのが注意を

ひく。

筆を結ぶにあたって、British Drama League (9 Fitzroy Square London, W. I.) において、Dorsetshire (Blackmore Vale) Dialect の一節を J. Clifford Turner 氏が同 Drama League で作成した Dialect records から phonetic signs で転写したものを Standard passage と共に掲げて、転写を通して Standard passage と逐語比較して、同 dialect の生態を、本論文において述べた所を参照しながら、察知されたい。

THE STANDARD PASSAGE

So you see I am right about that, mates.

The little girl coming from the school younder, past the byre.

Now there she is, going down the road through the red gate, on the left-hand side of the way.

I say ! The silly maid has gone straight up to the door of the wrong house.

Foolish child ! What's she thinking of; just where she will very likely chance to find that grumpy, shrivelled, deaf old fellow. We all know him well enough, don't we ? Of the name of Thomas, isn't it? Well, he can't abide the children.

Won't the rough edge of the old chap's tongue soon teach her not to do it again !

I warrant he's a treasure !

Look, isn't it true !

See her scuttling off, poor dear lamb !

That's his tune, sure.

Did you ever see such a sight in the world ?

Here comes the school master, too.

Hark at the noise !

註. 上記 passage の転写には出来る限り broad notations を用い、僅かな個所に narrow notations を用いる。転写作成に当っては故 Daniel Jones 教授及び Dr. Harold Orton の many helpful suggestions を賜ったことを

謝している。

Dorset (Blackmore Vale) Dialect transcribed

zo ju də zi: ʌbi ʌlit ɪbʌt ðik, mɪzʌnɪz.

ɪdɪl ma:ɪd əkomɪn vɪəm ðə sku:l jɑ:nðəɪ, pʌst ðə bɑ:ɪkən.

nʌv ðeɪɪ fɪbi' ə gwaɪn dʌun ðə ɾoəd θru: ðə ɾəd græt, vɪn ðə lɛft
zəɪd ə ðə waɪ.

luk zi: ! ðə sɪli ma:ɪd əv ə gɑ:n stræt ʌp tə ðə dræfɪ əv ðə
ɾəŋ hʌus.

vɪ:ɪf tʃaɪl ! wʌt bɪfi ə θɪŋkɪn o; ðæts dʒɛs wɜɪ fɪl moəst lɛɪklɪ
kʌm ə kɪɑ:s ðɪk snæpɪ, skɪmpɪ, dʌntʃ wo:ld vɛləɪ. wɪ'd a:l nɔ' ən
wɛl ənʌf, doənt wɪ' ? neəm ə tʌməs bɛnt ɪt ? wɛl nʌu hi keɪnt
əbʌɪd tʃɪldəɪn.

wɔ:nt ðə wo:ld tʃæps bæli ɾæɡɪn tʌʔŋ zu:n la:ɪn ʒ:ɪ nʌt tə du:
ət əɡeən !

əɪd əlʌv ɪ:z ə pɾæʔəɪ tɛɪɪənt !

luk si:, bɛɪnt ɪt tru: ?

nʌu ðeɪ fɪ' bi:ə sku:tɪn ɑ'f, pɔəɪ dɛɪɪ zɔul !

ðæts ɪz tʃuən, vɛɪ ʒuəɪ.

dɪd ɪ ɛvəɪ si zɪtʃ ə zʌɪt ɪn ðə wɜɪdl ?

hɪ'əɪ dɛ kʌm ðə sku:l meəstəɪ, tu:.

dʒɪs lɪsn tə ðə na:ɪz !

Note:

ɜɪ, əɪ, digraphs representing retroflexion of the vowel.

- 1 Retroflexion not very clear.
- 2 This seems somewhat retracted
- 3 Seems actually more open
- 4 Somewhat js-like

References

1. The English Dialect Dictionary. Ed. Joseph Wright. London, 1898-1905.

2. The English Dialect Grammar. Joseph Wright. Oxford, 1905.
3. A Grammar and Glossary of the Dorset Dialect. William Barnes. Philological Society, London, 1863.
4. The New Survey of Dialectal English in 'English Study Today', Harlold Orton and E. Dieth, Oxford, 1951.
5. British Drama League Dialect Records. British Drama League, London, 1960.